

★VOL 10 令和3年3月3日発行



絵本の楽しさをあそそ分け

■「ぼく うしになる」

中川ひろたか／作 サトウマサノリ／絵

昔から〈食事を終えてすぐ横になると牛になる!〉とされていますが、それをそのまま絵本にしてしまった作品。●ごちそうさまを言い、嫌いな



トマトを残してソファに横になったぼくは、突然、見知らぬ牧場で牛になってしまい、〈何だこれは?〉の世界になってしまいます。ページは進み、ちょっぴり笑える悲慘なことがくり返し身に降りかかり…でも最後はちょっと安心? ●見開きのページを大胆に使い、目に飛び込んでくるような絵が〈とんでもない世界〉に子どもたちを呼び込みます。●3歳後半くらいから。

■「あめのひのくまちゃん」

高橋和枝／作

日常の小さな世界、そしてささやかな幸せを描く作品。●ぱらぱら雨が降っている日の夕方、くまちゃんが原っぱの散歩に出かけます。雨の日の散歩は発見がいっぱいです。葉っぱの上に雨のしずくがつ



るっとすべて地面にぽたんと落ちるのをカエルたちが大喜び、池には雨水の輪っかができ、池の底のカエルの子が輪っかを見てふしぎに思っている…雨の日が見せるマジックを淡く柔らかな絵で切り取って描いています。●作者は、「だるまさんかぞく」シリーズや「りすでんわ」「くまくまちゃん」シリーズなどでも同じように、家族の温かな日常をちょっとした笑いを誘う文とほのぼのとした絵で楽しませてくれています。●3歳くらいから。

■「うさぎになったゆめがみたいの」

おくはらゆめ／作

保育園のお昼寝を題材にした可愛い作品。●みーちゃんはウサギになる夢が見たくて前歯を出して寝ました。でも夢の中でなったのはテンジクネズミ! 毎日試しても毎回違う動物になってしまいます…でも安心、友だちがみーちゃんにそっといいことを耳打ちしてみーちゃんの夢は大成功。●みーちゃんの見る夢の楽しさ、みーちゃんを応援する友だちのまなざしに作者の目配りがあり、やさしい気持ちになります。●3歳半くらいから。



■「ホットケーキのおうさま」 二宮由紀子／文 朝倉世界一／絵

作者は子どもたちが楽しめる言葉遊びやいたずらを心を含めた作品を数多く書いています。●ある日、9つのホットケーキが集まり、ホットケーキの王さまを決めることになりました。互いに自分こそはと言い合いますがなかなか決まりません。そこに女の子がやってきたので、ホットケーキたちは女の子に決めてもらうことに…。●最初と最後ではホットケーキたちの雰囲気がガラリと変わり、そのギャップがおもしろさにつながっています。それを楽しめるようになる4歳くらいから。



■「ガスこうじょう ききいっぱつ」 シゲリ・カツヒコ／作

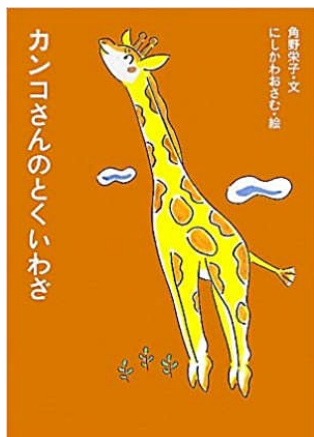
いしぎなガス工場で働くおじさんたちの物語の形を取りながら、最後の数ページでガス工場の秘密が明かされ、大笑いできる作品。●表紙をめくるととても大きなガス工場の全体図と働くおじさんたちが描かれ、24時間休まず動いている工場の物語が始まります。●工場の中で働くおじさんたちの姿はとてもしリアル。いろいろな部署ごとに役割があり、ガスを作り、ガスを発射するためにみんなで協力して働いています。●最後のページではおじさんたちの満足そうな表情と物語のオチがセットになって笑えます。●5歳くらいから。



本との出会いを ボーイズ＆ガールズに

■「カンコさんのとくいわざ」 角野栄子／文 にしかわおさむ／絵

アイウエ動物園シリーズの1冊。●キリンのカンコさんは、説明板に書いてある〈キリンは世界一せいたかのっぽ〉の〈世界一〉がとても気に入りました。そして、もっと背を高くしようとしてつま先立ちして背伸びをしたまま何日も過ごします。動物園の他の動物たちに何を言われても〈これが私のとくいわざ〉と言って意に介しません。●でも段々首が重くなってきたころに遠くを見るとリンゴを収穫しているようすが目に入ってきました。●ここからカンコさんの新しいとくいわざが生まれ



ます。カンコさんと園長さんのやりとりが楽しい物語。●シリーズの他の作品「いっばんくんのひとりごと」「しろくまのアンヨくん」「マリアさんのトントントンタ」「わにのニニくんのゆめ」もあり、文と絵の両方ともにステキ！●小学校低学年に。

■「みんなふつうで みんなへん」 枅野浩一／文 内田かずひろ／絵

本の帯に〈へんな思いこみやかんちがいをいっぱいして、みんなふつうに大きくなっていく〉とあり、まさしくタイトルどおりの物語。●3年1組の同級生15人がバトンリレーのように15の短い物を順に続けます。●第1話のボールとボウルを勘違いから始まり、授



業や教室での会話、友だちとのやりとりの中で知らなかったことや思い違いから気づいたこと、ちょっと恥ずかしかったことなどが語られます。●この物語を読む子どもたちはきっと「あるある」と共感を覚えるのでは…。最後のお話には、それまで登場した子どもたちがチラチラと出てくるので、お話全体を振り返り、余韻にひたれます。●小学校中学年に。

■「二年二組のたからばこ」

山本悦子／作 佐藤真紀子／絵

ものを大切にすることってどういうことだろう？をテーマにした物語。●二年二組のたから君は落とし物・忘れ物が多く、教室にはたから君の落とし物を入れる〈たからばこ〉があります。●たから君のとなりの席で、迷惑をかけられっぱなしのみなちゃんから見たたから君のイメージは、〈ものを大切にしないから落とし物・忘れ物が多い〉ですが、お話の最後には、それまでのたから君のことを思い出すと違う一面が見えてきます。●子どもたち同士で気づきあいながら成長する物語になっています。●小学校低学年に。



■「クローバーと魔法動物 1 運のわるい女の子」

ケイリー・ジョージ／作 スカイエマ／絵

わたしは運が悪いと思っているクローバーが「幸運はきっと自分のところにやってくる」と思えるようになるまでの成長物語。●クローバーは、自分の名前も誕生日も運が悪いと考えるほどマイナス思考の女の子。●ある日、カゴから逃げ



出したカナリアを追いかけて森の中に入り、動物と里親をひきあわせる動物紹介所にたどり着き、ボランティアとして働き始めます。●そこは単なる動物の紹介所ではなく、捨てられたり飼い主が手放した魔法の動物を新しい飼い主につなげる場所。●クローバーは魔法動物の世話をし、ユニコーンやドラゴンを必要としている人たちに自分の力で引き渡します。クローバーをだまそうとする魔女と戦い、人を正しく見極めることを通してクローバーの気持ちは変わっていきます。●気持ちの持ち方は変えることができる…を感じ、気づく作品。●訳者の解説では3作まで続き、現在は2作目まで刊行。●小学校中高学年に。

■「世界とキレル」

佐藤まどか／作

人と人とのリアルなコミュニケーションが今の時代には必要なのでは…と問いかける作品。●山の中の一軒家に隔離された状態で健康的な食生活と規則正しい生活を送るプロジェクトに7人の中学生が参加します。●物語の中心的な役割を果たす舞は、スマートフォンが手放せず、SNSでフォロワーを増やすのが生きがいですが、ここではスマートフォンが禁止。そして一緒に参加した仲よしでいよこの鏡花ちゃんとも気まづくなっています。タイトルの意味がわかる場面です。●7人それぞれの物語が背景にあります。●舞が起こしたあるできごとをきっかけに7人は濃密な関係に変わり、家族、勉強、貧困、自信や不安…みなそれぞれに抱えている悩みを生の言葉で語り合うことで、最終章のタイトルが〈世界とツナガル〉に変わります。希望を感じさせる終わり方です。●表紙の絵が印象的なので、手に取りやすいかも。●中高生に。●同じ作者の『アドリブ』は音楽小説ですが、中高生にオススメです。



■「ギフト、ぼくの場合」

今井恭子／作

小学校6年生のぼくは、かつて一緒に暮らしたお父さんを通してギターを弾く才能を与えられます。作中、〈ギフト〉という言葉が〈絶対音感は、神さまからの贈り物〉として使われています。●物語は、お父さんと離婚してからシングルマザーとなったお母さんがダブルワークをしても貧困から抜け出すことができない状況と、将来の夢を見ることもイメージすることもできないぼくの過酷な状況、そしてその中からとても小さいながら希望の光を見いだすことが描かれています。この物語では、目に見えない貧困とはこういうことなんだ…が具体的に描かれていて、今の社会を写し取っています。●好きなギターを弾くことが、貧困の原因を作ったお父さんにつながることに恐れを感じ、そんな自分を否定する一方、ぼくはお母さんが働いている工場の見学を通して〈モノを作る〉ことの喜びに触れ、〈あきらめる〉だけだった未来に、与えられた才能を生かす道を考え始めます。●ぼくやお母さんを支えるおとなたちの存在も見逃せません。●自身の才能とどう向き合うのかを考える音楽小説としても読めます。●中高生に。



■「風神風鈴物語」

夏也園子／作

古くから伝わる伝説を現代に蘇らせる仕掛けで読みやすい物語。●風鈴町の守り神として大事に祀られている風神の祠を子どもたちがいたずらしたため、風神と風神に仕える風子（かざこ）さんが現代に蘇ります。●物語は、子どもたちの身近な問題…友だちや兄弟との気まずさなどを、風子さんと子ども



もたちが一緒になって解決します。●登場する子どもたちの友だちが次のお話の主役になって入れ替わる4つの連作物語になっているのがミソ。そして子どもたちをつなぐたま子ちゃんが大事な役割を果たしています。●明るく、行動的で少しおちょこちょいな風子さんのキャラクターも見逃せません。●物語を読むのが苦手な子にもオススメ。小学校中高学年に。

■「ブラックホールの飼い方」

ミシェル・クエヴァス／作

刺激的なタイトルが物語の大事なテーマに直結しています。●大切な父親を失い、心の中にぽっかりと大きな穴が空いてしまった少女／ステラは、ひょんなことから巨大な暗黒の穴にすべての物を飲み込んでしまう子どものブラックホールを飼うことに…。ステラはブラックホールにラリーという名前を付け、嫌いなものやお父さんの思い出が詰まったものをすべてラリーに食べさせ、お父さんが死んだという現実から目を背けていきますが、あることをきっかけにして自分からラリーの中に入っていきます。●そこからのお話の進み方は、ラリーに食べさせたさまざまなモノたちがすべてつながり、ステラに立ち向かい、後から飲み込まれた弟のコスモと一緒に〈心の回復〉をする気づきと発見の冒険旅行に変わります。●作者の想像力が生み出した希望の物語は中高生ばかりではなく、おとなにも伝わります。●また、ラリーの愛らしくステラを見守る役割も魅力です。●他に『シロクマといっしょにお引っ越し』（マリア・ファラー作）にも、外国で新しい暮らしを始めなければならないジョーの不安に寄り添い、励まし役を果たすシロクマのミスターPが、ラリー同様、言葉はなくても絵と作者の文の力で読み手に伝えていて心が熱くなります。●小学校高学年に。

